2/20（火）校内研　提案授業

第３学年　道徳科学習指導案

日　時　令和６年２月２０日（火）
学　級　岩手大学教育学部附属中学校
　　３年Ｂ組３４名
会　場　３年Ｂ組教室
授業者　鈴　木　　駿

１　授業名

人は、どう生きていけばよいのだろう

２　教材名　「足袋の季節」（中学道徳３　きみがいちばんひかるとき　光村図書出版）

３　授業について

（１）　価値観

本授業は、「人間として生きることに喜びを見いだすために必要なことは？」について考えさせるために、D「主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」から、【（２２）よりよく生きる喜び】「人間には自らの弱さや醜さを克服する強さや気高く生きようとする心があることを理解し、人間として生きることに喜びを見出すこと」の内容項目について深めさせていきたい。誰しも心の中に、弱さや醜さがある。してはいけないと知りつつも流されてしまうことや、他人の不利益になると知りつつ自分の利益だけを追求してしまうこと、また、自分を律することができず怠けてしまうこともある。しかし人間は、良心によって、そんな自分の弱さや醜さに苦しみ、それを恥と感じることができる生き物でもある。弱く、醜い自分に、ただ劣等感を抱くのではなく、それらを認め、正面から向き合い、乗り越えて生きることが、よりよく生きることにつながる。

（２）　生徒観

生徒は、D「主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」を考えることの重要性について、70%の生徒が強い肯定を示しているが、これは他の内容項目A・B・Cに比べて10%以上低い数値になっている。加えて、「適切に生命や自然、崇高さについて考えることができているか」という質問に対して、否定的な回答をした生徒が他の内容項目に比べて10%程度高い（29.1%）。人間は、自分の欲求や願望が満たされることを善とする最初期の道徳性の段階から、相手との利害関係において行動を決定しようとしたり、社会における自分の役割の自覚して社会に貢献しようとしたりすること、人間の尊厳を正義と慈愛によって守っていこうとする上位の道徳性を身につけていく。現段階で生徒は「適切に自分自身を見つめることができているか（否定 22.7%）」、「適切に人との関わりを見つめることができている。（否定 14.6%）」、「適切に集団や社会との関わりを見つめることができている。（否定 17.3%）」と回答した。進路決定の大切な時期にあって、自分自身との関わりに難しさを感じている生徒が多く、高度で抽象度の高い思考を伴う道徳性をこれから身につけようとする段階である。受験への失敗の恐怖や、学習に向き合わなくてはいけないと思いつつもうまくいかない自分を拒まず、それを乗り越えてよりよく生きることの心情を高めたい。

（３）　領域研究との関わり（授業提案のポイント）

⓪道徳科が育成を目指す資質・能力

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
・道徳的知識を正しく理解し、道徳的価値の理解に役立てる力	・多様な視点から道徳的価値を応用したり、批判的に物事を捉えたりする力 ・相手や社会の視点に立って問題を考えたり、自分の状況をメタ的に捉えたりする力	・道徳的な問題を発見し、解決しようとする力 ・他者の意見を受け入れ、新たな価値を創造しようと協働する力 ・正しさや善を志向する態度

道徳科として育成を目指す資質・能力について、上記のように設定する。

知識及び技能について、生徒が道徳的価値の理解をするための、その価値の周辺にある知識などを理解させたい。例えば、【（１１）公正、公平、社会正義】について考えるとき、公正と公平の違いについて理解していなければ、「公平とは？」という問いに対して正しく思考し、自分の中での答えにたどり着けないことが予想される。そのほかにも、尊厳死や安楽死の違いなど、価値項目そのものの言葉の理解だけでなく、取り

扱う事象に対する正しい理解が必要である。

思考力、判断力、表現力等について、授業の中で多様な他者との関わりの中で物事を多面的・多角的に考えることはもちろんのこと、道徳科の授業での学びにとどまらない視野をもたせるように授業づくりを行う。また、人間の道徳性は身近な人間関係の視点を得たり、社会集団、全世界の視点を得たりしていくことによって発達していくものと考えられている。教材を読み、登場人物の心情を考えさせることにとどまらず、視野を広げて生徒に思考を促していきたい。

学びに向かう力、人間性について、教材や資料の中における道徳的諸問題を生徒自身が発見し、解決に向かおうとする心情を育んでいきたい。教師側から与えられる問いだけではなく、自分自身の経験や課題意識に基づいて解決したい問いを見いだすことは、生徒が主体の道徳教室をつくる一つの要素になる。問いを見いだす能力を生徒に身につけさせるため、例えば「この作品では何が問題になっていますか？」「自分の中で深めたい疑問はありますか？」と問いかけながら、生徒が主体的に関わる授業を展開したい。

①個別最適な学びと協働的な学び

道徳の授業に対する意識として、道徳科の授業に否定的な意見をもつ立場の生徒や教師からは、「授業が道徳的価値の“押し付け”になっているのではないか」という指摘を受けることが多い。特に、本校には教師の発問や教材提示の意図を読むことに長けている生徒が多いため、その傾向が強いように感じる。そのため、道徳科の授業においては、生徒の課題発見能力と、解決能力の育成を目指した授業への質的変換を図りたい。一つの教材に対して生徒がもった問いや課題意識を共有し、その意見に沿いながら教師も含めて教室全体で議論ができるようにしていく。その中で、授業の意図とは異なり、内容項目とは違う視点からの意見や問いをもつ生徒が出てくることも予想されるが、それはむしろ自然なことであり、教師のコーディネートによってそれらの意見も生かした授業展開をしていく必要がある。今回の授業では【（２２）よりよく生きる喜び】について考えさせることをねらいとするが、その他にも【（６）思いやり、感謝】の視点から考える生徒もいると考えられる。そういった生徒もねらいとする内容項目に触れられるようにしていく必要がある。

②教科等横断的資質・能力の育成

学校における道徳教育は、道徳科を要として教育活動全体を通じて行うものであることから、各教科や総合的な学習の時間や特別活動などの時間においても行われるものである。生徒が生きる今やこれからの社会は、息苦しさを抱えながら生活する人間が昨今増えたり、SNS での個人宛の誹謗中傷が社会的な問題になったりするなど、ICT の発達によって開けた社会に逆行するような、閉塞感を感じずにはいられない社会である。学校で学ぶ様々な知識や考え方、体験が、生徒個人の生き方や社会生活をより善いものにするために活用されることが望ましく、それを根底で支えるべきなのが道徳科の授業である。授業で考えたことが生活の中の様々な事象に応用され、望ましい行為につながるような「日常に生きる」道徳的な資質・能力を育成する必要がある。（過去に学べば、ノーベルが発明したダイナマイトや、ライト兄弟が発明した有人飛行機が本人たちの当初の思いとは異なり戦争に活用されてしまったりすることもある。）そのため、授業の中で生徒自身が生き方を考える上で重要だと思ったことを個人で深める時間を保証する。生徒自身の問題意識が、その思考の過程で一般化され、日常に転用できるような道徳的知識や心情になることをねらいとして行うものである。

③評価の充実（今回の研究授業では提案できませんが…来年度公開に向けて）

生徒自身が道徳の学びを振り返られるように、振り返りシートを充実させたい。年間を通して貫くテーマを「よく考え、誠をもって働く人間」に近づくために、という視点で振り返りをさせる。前期と後期で１度ずつ最も印象に残った授業を振り返らせる時間を設け、自分自身の考えを深めさせる。（全校で HS 交流会のように道徳について話し合う機会を設けてもよいか？）

４　本時について

（１）　ねらい

釣銭をごまかし、それを償うことができなかった過去のことを振り返った随筆を通して、自分の弱さや醜さを見つめてそれを乗り越えることの大切さについて考えさせ、誠実に生きようとする心情を育てる。

（２）　主題設定の理由

①価値観

「よりよく生きる喜び」について、「人間には醜さや弱さがある」という感覚は、「人間としての理想像」のイメージがあるからこそと言える。人間が心の内に弱さや醜さをもつと同時に、強さや気高さを併せもっていることを徐々に理解できるようになってくる。しかし、自分に自信がもてず、劣等感にさいなまれ、自分のよさを信じ切れずにいる生徒も少なくない。ただ、そうした生徒も、自分を向上させたいと願い、よりよい生き方を追い求める心をもっている。自分の弱さや醜さに気づいたとき、そこから目を背けるのではな

く、良心の呵責の苦しみの中で自分を深く見つめ、自分に向き合い、乗り越えようとする心を育みたい。そして、そうした自分のよさ、人間のよさに気づき、よりよく生きていこうとする心情を育みたい。

②教材観

筆者である中江良夫が、1920 年代の北海道小樽での出来事を振り返って書いた随筆である。貧しく苦しい生活の中、足袋を買う金欲しさに、釣銭をごまかしてしまった「私」の苦悩を描いている。生徒の生活実態とは距離があるものの、人間の心の弱さが表出し、それと対峙して乗り越えようとする人間の気高さや、多くの他者に助けられながら、人間はどのような境遇でも幸せに生きる喜びを得られることについて考えることのできる作品である。

（３）授業の構想

導入では、本時のテーマを生徒に提示する。「人は、どう生きていけばよいのだろう。」やや抽象的な問いとも考えられるが、卒業を間近にして、新たな進路に向かっていく３年生には適した問いであると考える。その後、前時に教材を読み、生徒が読んでいて疑問に思ったこと、みんなで考えたいことのアンケート結果を共有する。そこでは、①おばあさんに「ふんばりなさいよ。」と言われたときの私の心情は？②私がおばあさんに会いに行ったとき、どんなことを考えたのだろう？③P103L１「死というものが、こんなに絶対な…」という言葉の意味は？という３つの考えを紹介する。それについて考えさせ、内容理解を促したい。

展開の前半では、中心発問「おばあさんがくれた心をうけ、私はどう生きていけば良いと考えたか？」ついて個人で考えさせた後に、グループで議論する。

展開の後半では、議論の中で生まれてきた生き方を考えるために重要だと思うことについて、考えを深める。ここでは、生徒の自由な視点で考えさせたい。自身の体験に即して考えさせたり、問いに関わる事例を出してみたり、似た概念と比較して考えてみたりと、自分の考えに固執せず、多くの人が納得できるような共通見解が導きだされるように促す。

終末では、本時の問いについてもう一度自分の考えをまとめさせ、その考えの交流を行う。

（４）評価の視点

・「足袋の季節」における道徳的問題を発見し、クラスの話し合いで他者の多様な考えにふれ、その問題を解決しようとしているか。

・作品における人物の視点に立って問題を考えることで、よりよく生きることの難しさやそれを乗り越えていこうとする気高さを志向していこうとしているか。

（５）　本時の展開

段階	学習活動と主な発問 ◎中心発問　○基本発問　☆予想される学習者の反応等	■指導上の留意点および評価 ・指導上の留意点　○評価の視点
導入 10	１．本時のテーマを提示する。 人は、どう生きていけばよいのだろう。	
	２．教材を読み、生徒が疑問に思ったことや皆と考えたいことを提示する。 【生徒から出た疑問に思ったことや考えたいことの例】 ①「ふんばりなさいよ。」と言われたときの私の心情は？ ②私がおばあさんに会いに行ったとき、どんなことを考えたのだろう？ ③P103L１「死というものが、こんなに絶対な…」という言葉の意味は？	・生徒が教材を読み、どんな点に問いや感想をもったのか、学級で共有を図る。 ・考えたことはロイロノートで提出させ、共有を図る。
	３．提示した問いの中から、自分が考えたい問いを選び、考える。	
	４．考えたことを、学級で共有する。	・提出させた中から、意図的に生徒を指名し、意見を共有する。

展開 30	5．「おばあさんがくれた心をうけ、私はどう生きていけば良いと考えたか？」について、個人で考える。 【予想される生徒の反応】 ☆誰かが困っていたのを見つけたら、手を差し伸べてあげたいと思っている。（文章の内容をそのまま言い換えた例） ☆「ふんばりなさいよ。」という言葉は、私を支えてくれた大切な言葉だった。間違いを犯しそうになっている人にも優しく寄り添ってあげることではないか。（①の問いから迫った例） ☆籠を川に投げたとき、私は自分が「取り返しのつかないこと」をしてしまったという自責の念にかられている。そういった後悔がないような人生を送ってほしいということを胸に刻みながら生きていくのではないか（②の問いから迫った例） ☆私がおばあさんに会いに行けなかったのは、おばあさんを前にすると、罪を犯した自分の愚かさや弱さが露見してしまうからだ。だから、その弱さと向き合い、立派になって人生を送ることができるようにしなければならない。（③の問いから迫った例） ☆おばあさんの死によって、謝罪やお礼が永遠にできなくなってしまったことに対する公開の念を抱いている。自分の過ちを認め、よりよく生きていこうとすることが必要だ。（④の問いから迫った例） ☆「私にくれた心」とは、「思いやりの心」である。私はおばあさんがしてくれたように、誰かに思いやりの心を配りたいと思っている。	・考える際に、導入で考えたことも踏まえて考えるよう促す。
	6．グループで交流する。 7．学級で交流する。 8．議論の中で生まれてきた生き方を考えるために重要だと思うことについて、考えを深める。 【予想される生徒の反応】 ☆優しさとは誰のためのものだろう？ ☆人間は弱い生き物なのだろうか？ ☆どういうとき、人間は後悔するのだろう？ ☆死とはどういうものか？ ☆誇りを感じるのは、どういうとき？	・自分の生き方を考えるために、議論の中で出てきた言葉や、問題意識について考えるように促す。
	【問いに迫るために、考えたい視点】 ☆その物事や問題の本質を、深く洞察して言葉にしてみる。（辞書的な意味ではない） ①体験に即して考える →自分の弱さを感じたのは、勉強しなければならないときに、ゲームに手を伸ばしてしまったときだ。つまり弱さとは、自分の意志に反した思考や、行動をしてしまうことだ。 ②問題意識を出して考える →どうすれば失敗となるのだろう？ ③事例を出して考える →「誇り」と聞いて思い浮かんだ事例は、母校、優越感、認められる… ④似た概念と比較してみる →「施し」と「援助」はどう違うのだろう？	
終末 10	9．　問いについて自分の考えをまとめる。	○多面的・多角的に考えているか、自分との関わりのなかで書いているか ・具体の自分の姿も踏まえさせる。
	☆（多角的・多面的な見方へと発展させた記述例）授業のはじめでは失敗は悪いことだと思っていたが、失敗をきっかけに強くなることができることに○○さんの意見で気付くことができた。弱い自分を受け入れながら、自分の成長につながる生活がしてみたい。 ☆（自分自身との関わりのなかで深めた記述例）これまでの自分を振り返ったとき、自分は弱い存在だと思っていたが、人間は誰しも弱さをもっていて、それを乗り越えようとすることが大切なのだと気付くことができた。自分の弱さを認めつつ、強く生きることができるように、自分を律していきていきたい。	
	１０．　考えを交流する。	

4　参考文献

田沼茂紀（2017）『道徳科授業のつくり方　パッケージ型ユニットでパフォーマンス評価』東洋館出版社

荒木寿友・藤澤文（2019）『道徳教育はこうすれば〈もっと〉おもしろい』北大路書房

浅見哲也（2020）『こだわりの道徳授業レシピ』東洋館出版社

田沼茂紀他（2023）『道徳は本当に教えられるかー未来から考える道徳教育への 12 の提言―』東洋館出版